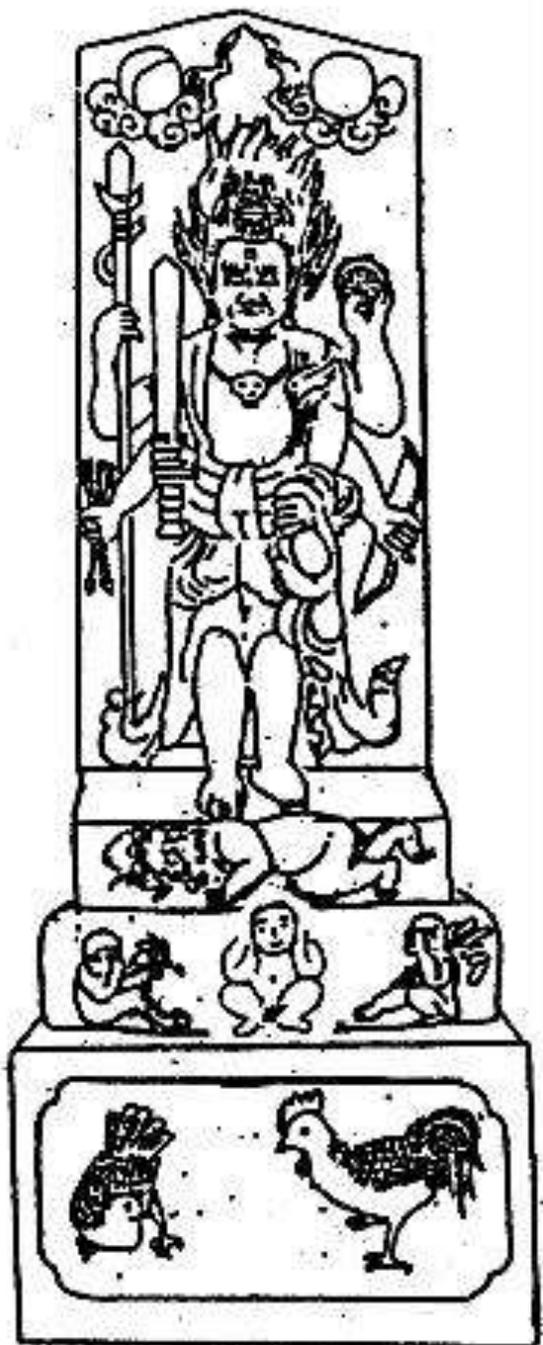


大聖寺の天保十年の庚申塔

加藤 幸一

大聖寺の庚申塔と言つと「百庚申」を思い浮べることでしようが、ここでは其れとは別の庚申塔を紹介する。

庚申塔は江戸時代の庚申信仰の名残りとして市内でも到る所に見られる。庚申信仰とは、体の中に潜んでいる三尸虫(さんしちゅう)が六十日に一度やってくる庚申の日の夜に、人の睡眠中に口から脱け出て天に昇り、その人が旧頃犯した罪を天帝に暴く。するとその報告を元に判断して若死にさせたりする。それ故、庚申の日の夜は三尸虫が身体から抜け出る機会を与えないように寝てはならない。そこで庚申講の仲間達が一堂に会し、徹夜して過ごす「庚申待(まち)」という行事が行われる。その記念として建立された石塔が庚申塔という訳である。かつては全国津々浦々で盛んに行われたが、明治になると急に衰頽する。



高さ約158cm

庚申塔の型式は様々あるが、大聖寺(大相模の不動尊)境内にある天保十年の庚申塔のように元禄の頃に完成した「日月・青面金剛・二猿・三猿」の基本形が代表的である。大聖寺の天保十年(一八三九)の庚申塔は、上部には左右に瑞雲に載った太陽と月が配置されている。中央の六本の腕を持つ青面金剛は頭髮は炎のように逆立ち、その中にとぐろを巻き鎌首をもたげた蛇らしき物が見られ、目は三つ目となり忿怒の形相をなしている。胸に髑髏の首飾(瓔珞)がある。又、各手には弓と矢や輪宝(矛先が八方に出ている)・矛・剣を持ち、女人の髪の毛を掴まえてぶら下げている。男尊女卑の現れである。但、女性の顔が約百五十年間の風雨に晒されて磨滅しているのが残念である。尚、三つ目と髑髏の瓔珞が描かれているのは珍しい。この二点は「陀羅尼集経」で説かれている通りとなっている。この経典に説く青面金剛の姿・形とは一部を碎けた表現で訳してみると次の通りとなる。

身体には四本の腕があつて、上の左手には三股叉さんこさを下さの左手には棒を持ち上の右手には輪宝を下さの右手にはけんじやく縋索を持つ。身体の色は青色で、口を張つて牙を出し、真赤な目をして三つ目となっている。頭の上には鬪たうを載せ、髪の毛は炎のように逆立っていて大蛇を巻き付けている。両腕からは竜を一頭ずつぶら下げていて、それらの竜の頭は互に向き合っている。腰には二匹の大きな赤蛇を纏っている。鬪たうの瓔珞（首飾り・胸飾り）を首に掛けている。両脚の足下にはそれぞれ鬼を踏み潰している。

一身四手。左辺上手把三股叉。下手把棒。右辺上手掌拈一輪。下手把縋索。其身青色。面大張口。狗牙上

出。眼赤如血面有三眼。頂戴鬪たう。頭髮聳堅如火焰色。頂纏大蛇。両腕各有倒懸一竜。龍頭相向。其像腰纏二大赤蛇。両脚腕上亦纏大赤蛇。所把棒上亦纏大蛇。虎皮纏跨。鬪たう瓔珞。像兩脚下各安一鬼。

青面金剛の足下には天の邪鬼と呼ばれる鬼が踏み潰されている。この庚申塔の鬼は手足の指がそれぞれ三本しかないのがおもしろい。その下には三猿がある。向かつて右端は御幣を持つ見ざる。御幣は神の依代である。中央は性欲の強い動物とされている猿が女性の臀部を連想させる桃を持つ聞かざる。桃持ち猿は庶民の間では子授け・安産・下（しも）の病の祈願の対象となっていた。左端の言わざるの猿は臍がみられ、その下の陰部も表わされていて雌猿とわかる。今と違って当時の性に対するおおらかさが窺われる。殆どの庚申塔は見ざる・聞かざる・言わざるを唯刻んでいるだけであるが、こ

のように描かれているのは珍しい。二鷄（雄・雌）は普通は青面金剛の下部の両脇に描かれていて、中には何の鳥か判明できない程に簡略に線刻されていたり、或いは全く刻まれていない物まで見られる。それがこの庚申塔では三猿の下に独立してあり、しかも細部まできちんと描かれていて珍しい。

以上からこの庚申塔は天保期のものと言え、江戸時代の庶民信仰をよく反映しているばかりか、芸術的にもすぐれ、他には見られない庚申塔であると信じており、何らかの方法で後世の人々のためにこれ以上風化しないように是非保存してもらいたいものだと思っています。